

# 岩手医科大学報

Iwate Medical University News

2013・1 vol.436

●発行者—理事長・学長 小川 彰 ●題字—大堀 勉

## 新年のご挨拶

理事長  
学長 小川 彰



明けましておめでとうございます。

昨年は、大堀勉先生のご逝去という悲しい出来事もあり、また、大災害の影響が残っている中厳しい大学運営を乗り越える事が出来たのは、皆様のご協力あつての事であり厚く御礼申し上げます。

さて、総合移転整備計画もついに最終段階になりました。矢巾地区に1000床規模の特定機能病院、内丸には高度外来機能を有するメディカルセンター（50床規模）を平成30年を目処に整備する計画です。内丸地区で残る建物は、本学創立の記念碑的意味を持つ1号館の他は、循環器医療センター（循環器医療としては使わない）とPET・リニアック先端医療センターのみです。

総事業費は約560億円を見込んでいます。様々な名目で公的補助はあるものの、基本的には大部分を自己資金でまかなわなければなりません。現病院は全てが老朽化しています。今後、新しい高額機器も続々登場してくるでしょう。しかし、必要とは言っても数年後に解体する施設に高額な設備投資をして行けば、新病院整備資金は減額され、将来の本学の核となる新病院が貧相な小病院並みのものとなってしまいます。皆の英知を結集して、診療・教育サービスを落とすことなく、現有の医療資源を活用して行く事が必要です。

新病院は、単に現病院機能をそのまま移すという「貧相」な発想では岩手医科大学の将来はありません。手術や高度診療を行う矢巾地区の病院と、市内・県内

外からの患者さんの交通アクセスが良い内丸の利便性を最大限に活かした高度な外来診断・外来治療・再来外来の拠点としての内丸メディカルセンターとの一体的運用が必要です。

特に、内丸メディカルセンターの機能は極めて重要です。外来診断ばかりではなく、今後の治療方針を決定できる機能を充実させ、必要に応じ矢巾本院へ送るなど一体的運用が必要です。また、がん外来化学療法、放射線療法など外来で可能な高度治療を提供する機能を併せ持つ必要があります。外来治療で済むとはいえ、大都市圏と異なり具合の悪い患者さんを数時間かけて僻地に帰す訳にはいきません。そのための50床でもあるのです。

いずれ、単なる病院移転ではなく矢巾本院と内丸メディカルセンターの一体的運用を核に、若い教職員の自由な新しい発想を取り入れ「日本・世界の新しい病院モデル」となるような病院新築を構想し実現したいと強く思っています。

今年は、薬学部初の卒業生の誕生、災害時地域医療支援教育センターの完成、復興関連の様々な医療支援研究事業の開始、WHO主催の「国際学術会議」の本学での実施等様々な事業展開の年でもあり「病院移転・大学大発展元年」となります。教職員一致一丸となって進んでいきたいと思っております。ご協力を切にお願い申し上げます。



# 大学院薬学研究科の開設について

大学院薬学研究科設置準備委員会

岩手医科大学では、かねてより大学院薬学研究科の設置認可申請に取り組んでまいりましたが、このたび平成24年11月8日付けで文部科学大臣より設置認可を受けることができました。

今回の特集では、平成25年4月に開設の決まった薬学研究科の概要とこれからの展望をご紹介します。

## 申請準備から設置認可まで

薬学部を開設した当初から薬学に関する大学院研究科を備える構想があり、平成25年を目処に薬学研究科を開設すべく平成22年11月に設置準備委員会を立ち上げました。

そこから約1年半にわたり、他大学にはどのような薬学研究科があるのか、将来的にどのようなニーズがあるのか、詳細な調査と検討が進められました。薬学部在学生へのアンケートはもちろんのこと、岩手県内の病院・薬局・薬剤師会からご意見をいただき、薬学研究科のあるべき姿を描いたうえで文部科学省と協議を重ね、平成24年5月に申請書類を提出して今回の設置認可に至りました。



## 薬学研究科の概要と今後の展望

薬学研究科には4年制博士課程（医療薬学専攻）と2年制修士課程（薬科学専攻）があり、それぞれの分野や研究内容は下記の構成になっています。

専攻	コース	分野
4年制博士課程（医療薬学専攻）	医療薬学コース	分子病態解析学 分子薬効解析学 薬物療法解析学
	生命薬学コース	創薬基盤薬学 生命機能科学
2年制修士課程（薬科学専攻）		

4年制博士課程（医療薬学専攻）には医療薬学コースと生命薬学コースにそれぞれの分野があり、学生は希望する分野を中心に学んでいきます。2年制修士課程（薬科学専攻）はコース・分野を設定せず、生命薬学の知識を網羅的に学んでいきます。

各課程では医療系総合大学としての特徴を生かし、附属病院で行われている診断、治療、薬剤師業務等における課題を、薬学研究科の教育・研究へ積極的に取り入れていきます。また、薬学研究科の教育には兼任講師として医学部・歯学部の先生方のご協力のもと、関連講座との共同研究、学際的な研究への積極的なアプローチが期待されます。



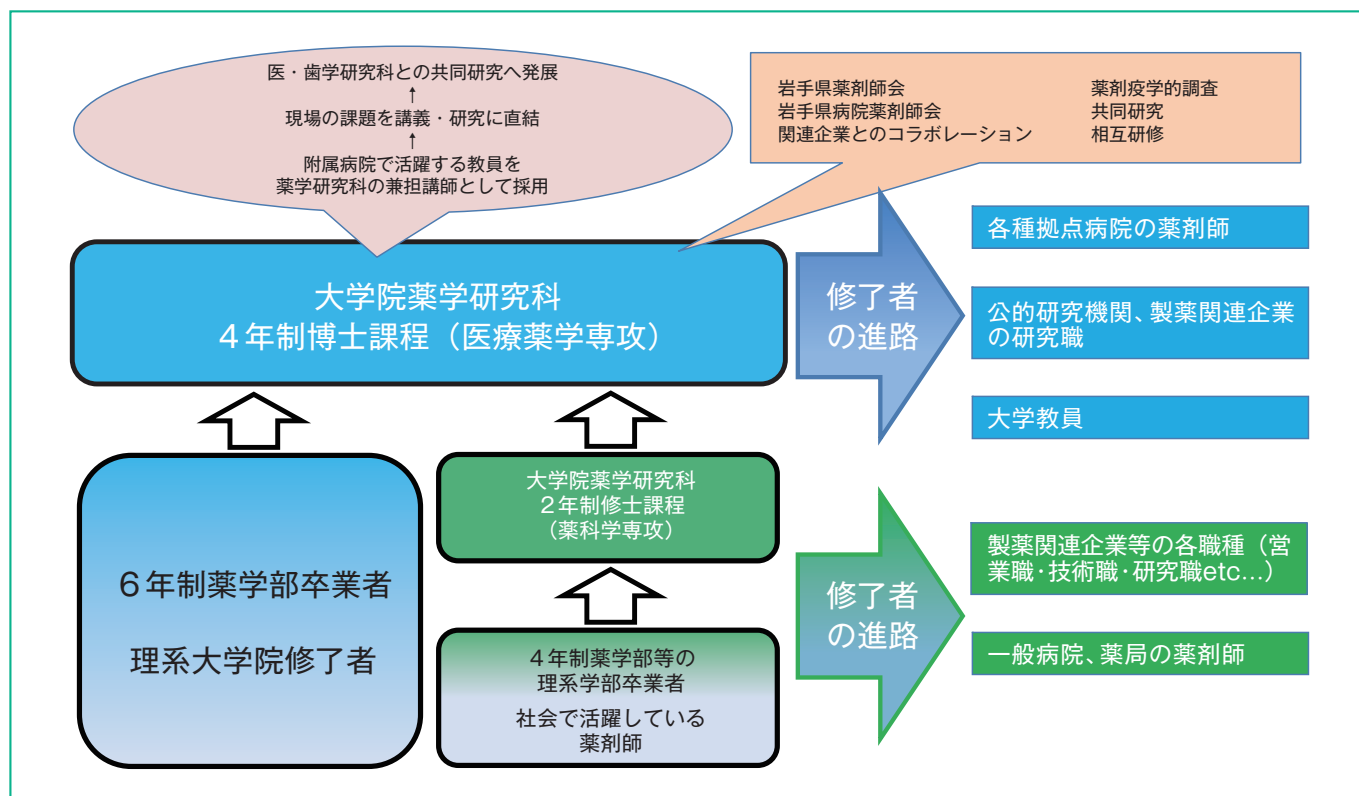
修了後の進路として、4年制博士課程については病院薬剤師、公的研究機関・製薬関連企業等の研究職、大学教員などを想定しています。2年制修士課程については、製薬関連企業等（MR、製剤技術者、CRO職員（※1）・SMO職員（※2）等）、病院薬剤師、薬局薬剤師などを想定しています。いずれも大学院修了者が活躍できる場を開拓するため、本学のキャリア支援センターを活用して就職先とのマッチングを図っていきます。

岩手県薬剤師会・岩手県病院薬剤師会、関連企業とは薬剤疫学的調査や共同研究、相互研修が計画されており、積極的に東北の薬業界の発展に寄与できる体制づくりを目指しています。さらに薬学研究科の完成年度後には、医学部・歯学部・薬学部の一層の一体化を図るため、医歯薬統合大学院として新たなステージに踏み出すことが計画されています。

※1 CRO（受託臨床試験機関）：製薬メーカーの治験等の業務を代行・支援する組織

※2 SMO（治験実施施設管理機関）：医療機関の治験業務を支援する組織

## 大学院薬学研究科 入学から修了までのイメージ



## 平成25年度の入学試験について

第一期生を迎え入れるための入学試験は下記の日程で実施します。

入学試験日程	4年制博士課程（医療薬学専攻）		2年制修士課程（薬科学専攻）		
	募集人員	3名（前期後期合わせて）		3名（前期後期合わせて）	
	出願期間 （消印有効）	【前期】平成25年1月4日（金）～平成25年1月18日（金） 【後期】平成25年3月1日（金）～平成25年3月15日（金）			
	試験日	【前期】平成25年1月26日（土）9：00～（矢巾キャンパス） 【後期】平成25年3月23日（土）9：00～（矢巾キャンパス）			

前期日程は終了しましたが、3月実施の後期試験は今からでも十分間に合います。学生募集要項は無料で配布しており、本学ホームページ（<http://www.iwate-med.ac.jp/research/daigakuin/pharm/>）からもPDF形式でダウンロードすることができます。

入学対象者は、6年制薬学部の卒業生はもちろんのこと、既に薬剤師として活躍されている方々や理系学部出身者にも門戸を開いています。

昼だけではなく夜間、土・日及び社会人の多くが休暇等をまとめてとり易い夏季休暇期間等に授業を設定し、単位を取得しやすいように配慮していますので、ご関心のある職員の皆様、お気軽にお問い合わせください。

【大学院薬学研究科に関するお問い合わせ先：薬学部教務課（内線5011～5016）】



## 薬学部第1期生の就職内定率が高水準に達しています

本年3月に卒業する薬学部第一期生の就職内定状況（平成24年12月1日時点）は、進学希望者※を除く殆どの学生が就職内定を受けており、高水準の内定率に達しています。

内訳は、病院などの医療機関が60名（44%）、調剤薬局が53名（39%）、その他、製薬メーカーやドラッグストアなどが17名（12%）です。現在は数名が就職活動を継続中ですが、全国の病院からの求人票も途切れることなく届いており、また、調剤薬局やドラッグストアなどの強い採用意欲にも支えられて、就職内定率100%は、ほぼ達成されるものと予想されています。

内定者の勤務予定地は、県内はもとより関東・関西などに及んでおり、今後全国での活躍が期待されます。

※来年4月に開設する本学薬学研究科を含め、大学院進学希望者は5名となっています。

## 附属病院移転事業の基本方針に係る記者会見が行われました

岩手医科大学総合移転整備計画の最終段階となる附属病院移転事業については、このほど矢巾地区と内丸地区の整備計画に係る基本方針を決定いたしました。

平成24年12月19日(水)午前11時から、記者会見が行われ、小川理事長と酒井附属病院長が今後進める事業の基本方針を発表しました。

決定した基本方針は、次のとおりです。詳細は本学ホームページで紹介されていますので、ご覧ください。



会見を行う小川理事長(左)と酒井病院長(右)

### 【URL】

<http://www.iwate-med.ac.jp/news/n1-information/12121901-kikaku/>

矢巾地区の基本方針	内丸地区の基本方針
<ul style="list-style-type: none"><li>○特定機能病院として1,000床規模の病院を整備する。</li><li>○病院規模は、8万5千～10万㎡、12～13階建を想定。</li><li>○小児・周産期・救急部門の一体化と機能拡充を図り、効率のかつ安定した高度医療提供体制を構築していくことを目的として統合医療センター（仮称）を整備する。</li><li>○新病院は平成30年度内の開院を目指して計画を進める。但し、消費税増税の決定等、厳しい社会情勢の中にあることを踏まえ、資金計画の状況に応じて開院年については都度調整しながら計画を進める。</li><li>○新病院の建設に合わせて道路の拡幅と街並みの整備を含めて検討する。</li><li>○岩手県から要請のあった県立療育センター及び県立盛岡となん支援学校の一体整備にあたっては、小児医療を含む統合医療センター（仮称）との円滑な運用連携を行うことを目的として、本学附属病院移転用地内に整備することとして計画を進める。（両施設の受入れに係る具体的な計画の進め方については、今後県と協議・調整を行っていく。）</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>○現循環器医療センターの建物と歯学部エリアを活用し、歯科医療センターを併設した50床規模の内丸メディカルセンター（仮称）を整備する。</li><li>○内丸メディカルセンター（仮称）は、盛岡市内はもとより県内外からの患者さんがアクセスしやすい内丸の利便性を最大限に活かし、高度な外来診療中心のセンター機能を整備する。高規格の診療機器を揃え、PET・リニアック先端医療センターと連携し、がん外来化学療法、放射線療法などを含む外来で可能な高度医療を提供する。</li><li>○開院年については矢巾新病院と同時期の整備計画として進める。</li><li>○移転後の附属病院跡地については、今後岩手県及び盛岡市と相談しながら、将来的な再開発計画を進める。</li></ul>

## 冬の医療安全講習会が行われました



冬の医療安全講習会が、12月17日(月)から6日間にわたり歯学部棟4階講堂において行われました(初日以外は録画映像による講習会)。今回は、浜松医科大学附属病院の今野弘之副院長(左写真)を講師に迎えて「外科領域におけるVTEの現状と対策」と題した講演が行われ、約2,000名の教職員が参加しました。

VTE(venous thromboembolism: 静脈血栓塞栓症)は、外科領域において発症リスクが高まっている危険因子とされており、参加者は発症原因や対策について理解を深めました。

## 平成24年度高大連携事業ウインターセッションが開催されました

県内5大学(本学、岩手大学、岩手県立大学、盛岡大学、富士大学)と岩手県教育委員会が主催するウインターセッションが、12月25日(火)から2日間にわたり矢巾キャンパス及び内丸キャンパスで開催されました。

この催しは、高校生が大学に触れる機会を広く提供することで進路意識の高揚と学力の向上へつなげると同時に、高等学校と大学との連携を円滑化して魅力ある大学をつくることを目的として平成15年から行われています。

今年度は、県内の高校生95名が3学部の講義と実習を体験し、最終日には受講生一人ひとりに修了証書が手渡されました。

参加者に実施したアンケートでは、多数の方から高評価を得ており、貴重な体験となった様子でした。



薬学部の調剤体験

## 平成25年新年祝賀式が行われました



平成25年の新年祝賀式が、1月4日(金)午後4時から来賓・教職員約220名の出席のもと、創立60周年記念館8階研修室で行われました。

祝賀式では、小川理事長から「本年は薬学部が完成年度を迎えて大学院薬学研究科が開設となり、より一層の医歯薬連携を期待しています。また、総合移転整備計画の最大事業である附属病院移転事業が大きく進展する年でもあり、職員の皆様にはご協力をお願いします」と年頭のご挨拶がありました。その後は、祖父江副学長により乾杯の発声が行われ、出席した教職員全員が新年を祝い、一年の決意を新たにしました。

## WHO国際学術会議が矢巾キャンパスで開催されます

WHO(世界保健機関)主催の国際学術会議「健康部門の復興に関する国際会議」が、3月5日(火)から2日間にわたり本学矢巾キャンパスで開催されます。

これは東日本大震災・津波から得られた教訓を国際社会と共有し、将来起こりうる健康に関する緊急事態に役立つ情報を発信するための活動を行うため、甚大な被害を受けた岩手県において「WHO国際学術会議」を開催し、その成果を広く全世界に情報発信を行うことを目的としています。

会議には、世界各国からの出席者を予定しているほか、小川理事長をはじめとした本学教員による基調講演が行われる予定です。

※詳細については、後日、本学ホームページ等でお知らせいたします。



## 表彰の栄誉

### 澤良悦さん・帷子康子さんが文部科学大臣表彰 (医学教育等関係業務功労)を受賞しました

本学附属病院中央放射線部副技師長の澤良悦さん(左)と東5階看護師の帷子康子さん(右)は、11月22日(木)に文部科学大臣表彰(医学教育等関係業務功労)を受賞しました。

この賞は、国立、公立及び私立の大学における医学又は歯学に関する教育・研究若しくは患者さんの診療等に係る補助的業務に関し顕著な功労のあった方々を表彰することにより、関係職員の士気を高揚し、医学又は歯学教育の充実向上を図ることを目的として、昭和49年から実施されています。

澤さんは昭和56年8月に、帷子さんは昭和53年4月にそれぞれ採用され、本学における医学教育・研究及び大学病院における患者さんの診療等を支える業務に長年にわたって精励し、本学医療の資質向上に貢献されています。



### 関根眞理子さんが岩手県知事表彰(保健医療功労)を受賞しました



医療専門学校の関根眞理子校長補佐(前歯科衛生士長)は、長年にわたり保健医療に関する団体の運営に尽力し、その功績が顕著であったとして、平成24年度の岩手県知事表彰(保健医療功労)を受賞しました。

関根さんは、昭和47年に採用された後、本学附属病院において歯科衛生士業務に精励し、歯科衛生士長として若手の指導・育成に尽力するなど歯科衛生部全体の資質の向上を図りました。また、医療専門学校の臨床実習指導や講義にも出向き、学生教育にご尽力されました。

## 理事会報告

### ■11月定例(11月26日開催)

#### 1. 教育職員の人事について

薬学部臨床薬理学講座 教授 工藤 賢三(現 准教授)

共通教育センター 外国語学科英語分野 准教授

工藤 裕子(現 講師)

(発令年月日 平成25年4月1日付)

#### 2. 岩手県子どものこころのケアセンター(仮称)の受け入れ及び設置について

岩手県からの「平成25年度子どものこころのケアセンター」運営事業実施に係る協力要請を受け入れることとして、事業開始に向けて次のおり進めていくこととした。

・本学施設内に「中央子どものこころのケアセンター(仮称)」を設置

設置場所: マルチメディア教育研究棟1階西側

・選定業者等

設計: (株)日建設計

建築工事: 清水建設(株)東北支店

機械設備工事: (株)朝日工業社東北支店

電気設備工事: (株)興和電設

## 第105回大学報編集委員会

日 時：平成25年1月17日(木) 午後4時～午後5時

出席委員：影山 雄太、齋野 朝幸、藤本 康之、小山 薫、下山 佑、山尾 寿子、佐々木 さき子、  
昆 由美子、佐々木 忠司、畠山 正充、鈴木 尚子、武藤 千恵子、野里 三津子

天気の良い日には積もった雪が風に舞ってキラキラと輝き、まるでダイヤモンドダストのようです。また、積もった雪をそっと手にとってみると、図鑑で見たような雪の結晶を見つけることもできます。北東北ならではの美しい光景は、県外出身者にとっては今でも感動的です。ただ、被災した方々のことを考えると、素直に喜んでいてよいのかと複雑なところもあります。

(編集委員 藤本 康之)

## 岩手医科大学報 第436号

発行年月日 平成25年1月31日

編集 岩手医科大学報編集委員会

事務局 企画部 企画調整課

盛岡市内丸19 - 1

TEL 019-651-5111 (内線7023)

FAX 019-624-1231

E-mail:kikaku@j.iwate-med.ac.jp

印刷 河北印刷(株) 盛岡市本町通2-8-7

TEL 019-623-4256

E-mail:office@kahoku-ipm.jp

# すこやか スポーツ医学講座

## No. 43

形成外科学講座

助教 柏谷 元



### 『眼瞼下垂症』について知っておきましょう！

眼瞼下垂症とは、何らかの理由により上眼瞼（うまぶた）が下がり、“瞼が重い”、“眼が開けにくい”、“物を見るのがつらい、疲れる”などの自覚症状を伴ったものを指します。原因にはいくつかあり、年齢とともに徐々に下垂が進行してくる加齢性下垂、若年層でもコンタクトレンズ長期着用やドライアイによる眼こすりなどから生じてくる腱膜性下垂、生まれつきどちらかあるいは両方の瞼が下がっている先天性眼瞼下垂、その他に目の周りの筋肉、神経の異常による眼瞼下垂もあります。

ここでは、当科で最も頻度が高い腱膜性および加齢性眼瞼下垂について説明します。この二つは発症機序が基本的に同じです。図1は正常な上眼瞼の断面図です。この中に挙筋腱膜という構造がありますが、これはちょうど足で言えばアキレス腱みたいなもので、筋肉の端が白色の靭帯みたいになっているところです。ただ、アキレス腱のように太く強くはなく、瞼のそれは薄くて、人によっては透けて見える程度ことがあります。この腱膜が上眼瞼挙筋の力を伝え、実際に瞼が挙がって（眼が開いて）いるのです。次は眼瞼下垂症の人の断面図（図2）を見てください。ここでは腱膜が瞼の皮膚から離れ、奥に引っ込んでいるのがお分かりかと思いますが、この腱膜の離れが腱膜性眼瞼下垂の基本です。この状態では有効に瞼を引き上げることが出来ないわけです。

このような方々を診察しますと、瞼の下垂以外に次のような随伴症状を高率に認めます。①眉毛挙上

と前額（おでこ）のシワ、②頭痛、肩こりです。①は瞼が下がっているのを代償しよう（頑張って何とか開かせよう）と無意識に前頭筋が収縮しているためです。この持続収縮は休むことのない筋緊張状態を起し、それが前頭筋から後頭筋、そして肩や背中中の筋肉へと波及します。これが②の理由となります。眼瞼下垂を手術した後に頭痛や肩こりが楽になったという声が聞かれるのはそのためです。

さて、治療ですが、これは基本的に手術しかありません。ですが手術と言っても局所麻酔で行え、瞼一つに対し1時間ぐらいの所要時間で、日帰りも可能です。注意は“瞼は腫れやすいこと”、“皮膚が薄いので皮下出血が紫色に透けて見えてしまうこと”です。これらは数週間から1か月ぐらい続きますので、手術のタイミングについては良く考えましょう。

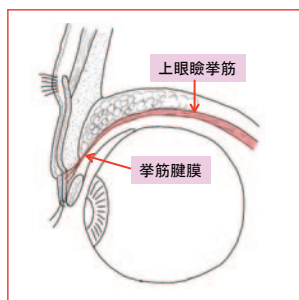


図1

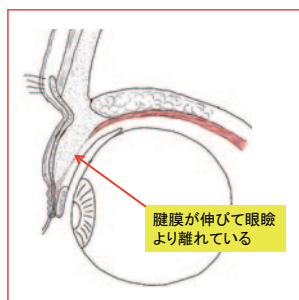


図2

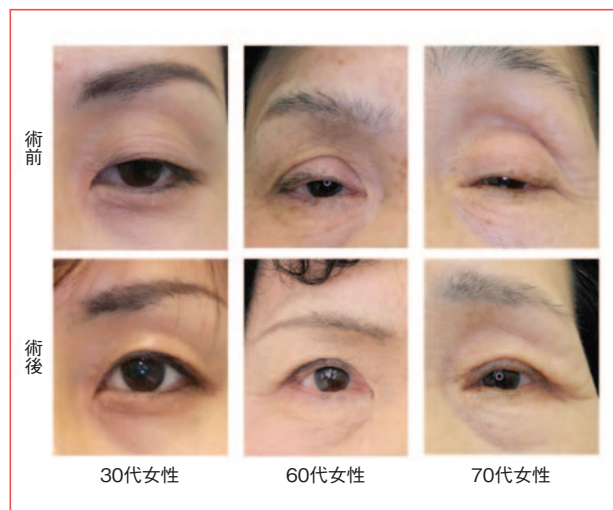


図3

図3は実際の施術例です。あなたの周りに眼瞼下垂症の人を見かけたら、“それは手術で治るかも？”と教えてあげましょう。瞼が軽く開くようになり（楽になり）、見た目も改善される有効性の高い治療なのです。